



Title	私のモンゴル滞在記 : 帰国後半年で見えてきたこと
Author(s)	大野, 暢子
Citation	モンゴル研究. 2007, 24, p. 64-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102333">https://doi.org/10.18910/102333</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《会員のページ》

## 私のモンゴル滞在記

## —帰国後半年で見えてきたこと—

大野 暢子

久しぶりに古びたノートを手にとりました。まだ購入して1年にも満たないのに、黄ばみが目立つし泥や砂で汚れています。昨年夏、初めてモンゴルを訪れ一ヶ月滞在していた時むこうでつけていた日記です。この旅でお世話になった方に、西村幹也さんという、草原の民に愛され、恐れられる、モンゴルに精通した方がいます。

西村さんとの出逢いは、今岡先生が新入生にいい経験をして欲しいと、外大に馬頭琴奏者ネルグイ氏を招待してくださった昨年四月にさかのぼります。西村さんはネルグイさんと全国ツアーをしていらっしやいました。

彼が毎年夏に企画・運営されているモンゴルの田舎の旅行ツアーの存在を聞かされたのはこの時でした。

日本から飛び立ってウランバートル空港に降り立ち、首都から西へ2時間ほど車を飛ばしたところにある夏営地(通称ばあちゃんち)を拠点にしたツアーなのだと、熱く語って下さいました。

「草原直行直帰のワイルドなツアーだよ。馬で4泊5日かけて草原を旅するんだ。」

一体どんな内容なのか、馬に乗るとは一体どの程度乗るのか、何も知らなかったことは確かです。しかし私は気が付いたらツアーのスタッフをやらせてくれとお願いしていました。

西村さんは豪快に笑って二つ返事でOKして下さいました。モンゴルの何に興味があるのか分からないけど、気が付いたら入学から1年が経ってしまっていたし、何とかしてモンゴルに関わりたいて、気ばかりあせる2年の春でした。

しかし、迎えた8月、私は自分のこの単純さを少なからず恨みました。

外国へ行くのは初めて、アウトドアも初めて、馬はポニーしか乗ったことがないという初めてづくしで望んだ旅。しかも、私はツアーのお客さんではなくて、スタッフ。お客さんの食事作り、テント張り、お世話になるゲルの仕事のお手伝い、簡単な通訳・・・などの雑用をこなす代わりに、お金は1銭も払っていません。足手まといにはなるまいと奔走しましたが、心が折れそうになることもしばしばでした。この頃の日記は愚痴で埋め尽くされています。

まず、乗馬初心者なのに、いきなり馬に乗って一日10~20kmを、群れで移動するという強行軍には閉口しました。馬のほうも私のところさを分かっているらしく、思う通りに動いてもらえるわけもなく、ごろごろ落馬しました。

そして何より悔しかったのが、私の話すモンゴル語の拙さでした。牧民さんや現地スタッフのモンゴル人学生とは、すぐ打ち解けましたが、私は「モンゴル語専攻学生」を名乗っている以上、思った以上に話せない事に対してよく「おまえは日本でなにを勉強してるんだ」と言われたものです。

それでもどこかで開き直れたのでしょうか。徐々に、ただ「美しい」とだけ思っていた風景の向こうに何かを見なくては、という念に駆られ始めました。ホームシックの気持ちは常に付いて回りましたが、1つ1つの出逢い、一個一個のハプニングを楽しむように努力しました。

草原の向こうに大規模な某カドカワ映画のロケ



隊を発見し、皆で馬でつっこもうとして怒られたこと、ヒツジの解体を見たこと、日本語専攻のモンゴル人の女の子と大喧嘩したこと、そして仲直りしたこと、日本に帰ることばかり考えていたこと、西村さんに怒られたこと、3人の牧民たちと相撲をとって玉砕したこと、結婚式の余興・・・直接勉強には関係のないことばかり心に残っています。日記を見ると今でもありありと思い出されます。

さて、「お前はモンゴルに行って何をしてきたんや」と言われたら、「西村さんの長年作り上げたフィールドで遊ばせてもらってきた」と答えるのが妥当だと思います。

「西村さん、来年もスタッフとしてリベンジしていいですか？」

と、尋ねたことがあります。

大きくうなずいてくれる事を期待していましたが、返ってきた答えは意外なものでした。

「半分イエスで半分ノーだな。君が来年どれだけスタッフとして成長したかもみてみたい。でも所詮これは『俺がつくったモンゴル』だから。君はモンゴルを専攻しているんだから、『大野のモンゴル』をつくっていきなさい。」

最初はこの言葉の意味が分からず、寂しい気持ちになりました。自分はこの経験で何を得てきたのだろう、と帰ってきてからも悩み続けました。一ヶ月も行ってきたのに、興味のあるテーマが決まらない自分はだめなやつかなとも感じました。ただし、「旅でお世話になった人との出会いや、みたものを無駄にしたくない」という気持ちと「思い通りにモンゴル語でコミュニケーションをとれなかった」という悔しさは、常に自分の中にありました。

その気持ちが、モンゴルに対するモチベーションを知らず知らずのうちに上げてくれていたことに、すぐには気づけませんでした。

今では、自分がモンゴルに関われていることを今までで一番嬉しく思えるし、充実して過ごせているなど実感している日々です。あれから興味のある研究テーマもできました。

「ナショナリズム」と「フェアトレード」が、目下のブームです。

前者は、建国800年に沸くモンゴル国の高揚を間近にみてきた事と、愛国心が幅をきかせてきた印象のある日本の社会情勢に感じるものがあったからです。ナショナリズムを求心力にせざるを得なくなったのは、国家が何かの点で行き詰まりを

感じているのでは？という仮説をたてて考察しています。

蔓延する「実存主義」「全体主義」を放っておいて、それを国家に利用されたとき、私たちは果たして気づくことができるのだろうか、という危惧があります。加熱してきた憲法改正問題は、私たちの子どもや孫の時代どころか、来年、再来年の社会をも左右する大問題です。今、疑ってかからなければ、気がついたら戻れないところまできてしまった、という事態になるのかもしれないのです。今はまだ、先輩方の卒論や、新聞の関連記事を読み漁る段階で、自分の無知さやつめの甘さを実感する日々です。

「フェアトレード」は、最近講義をきっかけに興味を持ち始めました。日本をはじめとした先進国が安いものを海外から輸入すればするほど、立場の弱い人々の貧困に拍車がかかっているという悪循環に衝撃をうけました。「フェアトレードのシステムが広く受け入れられればいいんだな」と思っていたのですが、どうやら事態はそこまで単純ではないようでした。物流の末端にいる、生産者の人々の労働組合や労働条件の土台が整わないと、雇用している企業に搾取されて結局利益が行くべきところに行き渡らない現実がありました。まずは、自分が豊かな日本に暮らしていることがどうということなのか。見たくないものも含めて、恐れずに見ていきたいと思っています。

「すべての物事には理由がある」という事が実感されてきた頃から、何かを追及することが楽しくなりました。教育基本法が改正されたことにも、チンギスハーンがうけ始めたことにも、日本の商社が儲けていることにも全て理由があって、毎日

ただメディアの言うことを鵜呑みにしているだけではそれらに気づけない。

それから「打算的に勉強しない」ということも分かりました。「何を勉強したら将来役立つか」という事に気持ちが偏っていた時期もありました。

モンゴルで知り合った観光客のお兄さんに頂いた言葉がノートに書いてあります。彼は自分のしている仕事を好きで、その専門に誇りを持っている素敵な人でした。

『『将来のためにこれをしておこう』なんてことは考えないほうがいい。社会は『大学で得た知識を生かしてくれよ』とは期待していない。『一瞬一瞬好きなことのためにどれだけ行動できたか、学んだか』というのが財産になって、一生役に立つんだよ。』

まだまだ学問の道は険しいですが、私はこれから一生どこにしようと、モンゴルと体あたりで向き合った4年間で誇れるようにしたいです。

今しか出来ないことに後から気づかせてくれた一ヶ月の体験は始まりにすぎませんでした。西村さんのあの言葉の意味が今なら少し分かります。

次にモンゴルに行くときまた持っていこう。もう一度汚いノートを本棚にしまいました。



(おおの まさこ)